生涯音楽学習の視点から見たピアノ学習の状況
――1998年と2021年の調査結果の比較を通して――

A Study of Piano Lessons from the Perspective of Lifelong Music Learning:
Comparisons of Survey Results in 1998 and 2021

唐　津　美　和
KARATSU Miwa

キーワード：生涯音楽学習，ピアノ学習，アンケート調査，大学生，経年比較

１．研究の目的と方法

１－１. 研究の目的

小中学生のピアノ学習率は，1970年代前半に急激に伸び，その後，1980年代の半ばをピークに減少傾向を見せ，BANDAIの2019年の調査では，24.9%である（BANDAI 2019）。ピアノは現在でも中心的な習い事の１つであるものの，少子化に伴い，ピアノを習う子どもの数は減少し，さらに様々な理由からレッスンを途中でやめてしまう子どもが多く見られる。一方，成人の状況に目を移すと，平均寿命が年々上がり，着実に高齢化が進んでおり，経済的，時間的な余裕から，自分の趣味に費やす時間が増え，ピアノをはじめ，音楽に親しむ高齢者が増えている。時代の変化とともに，社会の状況や人々の考え方もめまぐるしく変化し，生涯音楽学習の時代を迎え，ピアノ教育も多様化している。ここでいう生涯音楽学習とは，「すべての人々が生涯にわたって，そしてあらゆる次元で行う，自由な音楽活動（音楽の享受・表現・創造）そのものを意味する概念」（丸林実千代 1999：20）である。

このような背景を踏まえ，本研究では，現代の若者が，今までどのようなピアノ教育を受けてきたのか，ピアノ学習に関してどのような考えをもっているのかなどについて調査することとした。こうした視点からピアノ学習の調査を行ったのが川村有美である。川村は，1998～1999年に教員養成系大学[1]の学生を対象に「ピアノ学習に関するアンケート」を実施し，そこから得られた示唆をまとめている（川村 1999）。本研究では，川村の貴重な調査を活用し，川村が1998～1999年に実施した調査（以下1998と略記）と2021年に筆者が実施した調査（以下2021と略記）とを可能な範囲で比較し，23年間でピアノ学習においてどのような変化が見られたのかを分析，検討するとともに，その結果から，現在のピアノ教育の課題を見つけ，生涯音楽学習に向けた今後のピアノ教育のあり方への示唆を得ることを目的とする。

１－２. アンケート調査の方法

筆者は，研究の対象とした教員養成系大学の学生へのアンケート調査を次のように実施した。

（１）調査期間：2021年７月19日～８月６日

（2）回答者：アンケート調査の対象を，1998とほぼ同じ教員養成系大学の学生とした。対象者数は，コロナ禍もあり，結果的に1998の人数（607名）の８割程度（486名）となった。

（3）調査方法:川村は，対面でアンケート用紙を配布して調査を行っているが，今回はコロナ禍のため，Google フォームを使用し，倫理面に十分配慮した上で回答してもらった。

（4）調査内容：具体的な質問項目について，川村のアンケート（1998）は巻末の資料１，唐津のアンケート（2021）は資料２を参照。

（5）Google フォーム作成:川村の先行研究を参考にし，筆者が作成した。1998の回答方法は，ほとんどが自由記述であったが，2021は，Googleフォームでの回答であることを考慮し，選択肢による単一回答を主とした。さらに質問１，15，17，19，20，21を加え，質問19～21は複数回答にした。なお，1998の質問８及び2021の質問14～18と21は，紙面の都合で省略した。

（6）有効回答率：81.5%（396/486）であった。対面でなかったため，質問を最後まで読まず，未記入や回答しなくてもよい質問で回答してしまう学生が多数出てしまった。なお,個々の質問項目における欠損については，欠損を除いた分を母集団とした。

（7）その他

・2021は，1998とは回答者の大学，人数，回答方法等が全く同じではないため，両者の完全な比較はできないが，そのことを前提にしつつ，アンケートの結果から，23年間の社会や人々の考え方の変化などを踏まえ，傾向として読み取れるものを分析，検討した。

・2021年２～３月に，国公立大学及び私立大学教育学部の大学生17名を対象に，ピアノ学習に関するインタビュー調査を実施した。詳細は別稿で紹介する予定だが，そこでの回答内容も一部，補完的な資料として用いた。

・1998は％のみ示されているが，2021は人数と％を示した。ここで示す分析対象者の人数は，2021のものである。また，1998のグラフ及び表は，川村の調査結果をもとに筆者が作成し直した。

・年齢を表示する際，1998は才を用いているが，2021は歳を用いた。

２．アンケート調査の結果

2－1. 男女比（分析対象者：396名）

質問１では，アンケートの対象者となる学生の性別を質問した。1998は，教員養成系大学の学生607名を調査しているが，男女比は公表していない。2021の男女比は，男性32.1%，女性67.9%であった。教員養成系大学の学生の男女比を調べてみると，埼玉大学教育学部は，男性43.3%，女性56.7%，玉川大学教育学部は，男性37.7%，女性62.3%であり，いずれも女子学生の方が多かった（河合塾Kei-Net）。教員養成系大学では，小学校の教員免許を取得する学生が多いため，女子学生の方が多いことが推測される。

2－2. ピアノ学習率（分析対象者：396名）

質問２では，ピアノの学習経験について質問した。結果は，［表１］の通りである。

［表１］ピアノ学習率

	経験者	未経験者
1998	41.5%	58.5%
2021（人）	53.8%（213）	46.2%（183）

2021のピアノ経験者の割合は，53.8%と高い数値を示した。男女別の学習率は，男性23.6%，女性68.0%である。2021の大学生が学齢期の頃の全国平均のピアノ学習率は, 2007年の文部科学省調査（文部科学省 2008）によると29.0%（男子：10.1%，女子：45.7%）であり，男女とも全国平均値を大きく上回った。女子学生が約７割を占めるため，数値が高いのは当然である。また，男子学生の学習率が全国平均値の倍以上を示していることも学習率の高さの要因と想定される。

1998の教員養成系大学の学生が学齢期の頃（1985年）の全国平均のピアノ学習率は，32.3%[2]（川村 1999, 26）と推定されることから，学齢期の全国平均のピアノ学習率は32.3%から29.0%へと約３ポイント減少しているにも関わらず，2021は1998より10ポイント以上上回り，予想をはるかに超える結果となった。1998も41.5%と全国平均値より約10ポイント高い数値となっているため，教員養成系大学の学生のピアノ学習率は現在も変わらず高く，単純な比較はできないものの，増加傾向が見られる。

川村は，当時の調査対象となった大学生のピアノ学習率の高さについて，次のように述べている。

> ピアノ学習は親の学歴, 経済的な条件と関連の深いおけいこごとであった。（略）子どもを大学に進学させるような層においては，ピアノ学習率が高く，それが本調査での高学習率に結果したものと推測される（1999：45）。

ピアノを学習するにあたっては，楽器を買わなければならないことや他の習い事に比べて月謝が高いこと[3]から，ピアノは習い事の中でも，経済的に余裕のある家庭の子どもが学習していると推測される。このことは，後述する質問19と20の結果を見ると，アンケートの対象者のうち，39.1%が母親も経験者であること，29.5%がアップライトを所有していることからも読み取ることができる。

２－3. ピアノ学習の場（分析対象者は，未記入者2名を除き211名）

質問３は，ピアノ学習の場について質問した。結果は，［表２］[4]，［表３］[5]の通りである。

［表２］ピアノ学習の場（1998）

	個人の教師	音楽教室
1998	80%	20%

［表３］ピアノ学習の場（2021）

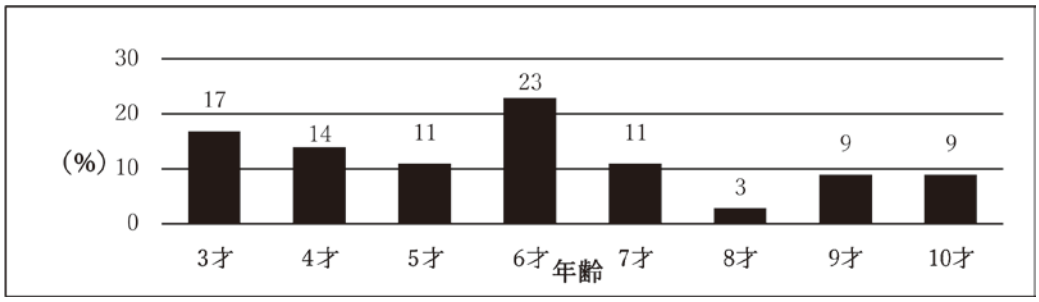
	個人の教師	ヤマハ・カワイなどの大手の音楽教室	大手の音楽教室以外の音楽教室	その他[6]
2021（人）	63.0%（133）	27.0%（57）	1.4%（3）	8.5%（3）

1998も2021もピアノ学習の場は，個人の教師が多かったが，2021は，1998よりも個人の教師が，80%から63.0%に減少し，音楽教室が増加した。今回「その他」の中には，幼少期はヤマハで学習し，その後，個人の教師に移行した学生も含まれていることから，大手の音楽教室で学習した子どもの割合は，実際は27.0%よりも多いと推測される。特に２歳や３歳で習い始めた学生は，ヤマハやカワイなどの大手の音楽教室で学習している。これは，ヤマハ音楽教室を例にあげると，「ドレミらんど」[7]や「おんがくなかよしコース」[8]など低年齢から始められるコースが設置されているからであろう。これらのコースは，ピアノを習うというよりは，歌や音楽遊びの楽しい体験活動を通して，音楽に対して興味，関心，意欲をもたせるというものである。大手の音楽教室と個人の教師の両方で学習した学生は，幼少期に大手の音楽教室でこのような音楽全般に触れる体験を数年重ねてから，個人のピアノ教師に移行していったと想定される。また，大手の音楽教室で習った学生が増えた要因としては，駅の近くにあり利便性がよいこと，「ヤマハ・カワイ」という知名度が高く，TVCMやチラシなどの宣伝効果も多大であること，教師をわざわざ探さなくてもよいこと，個人の教師よりも入退会や月謝の支払い等事務手続きが楽であり，子どもが始めるきっかけとしては非常に手軽であることなどが推測される。実際，2021年２月にインタビュー調査[9]を行った私立大学教育学部の女子学生の中には，自宅に入ったチラシを見て，親に勧められてヤマハ音楽教室に通い始めたと答えた学生もいた。

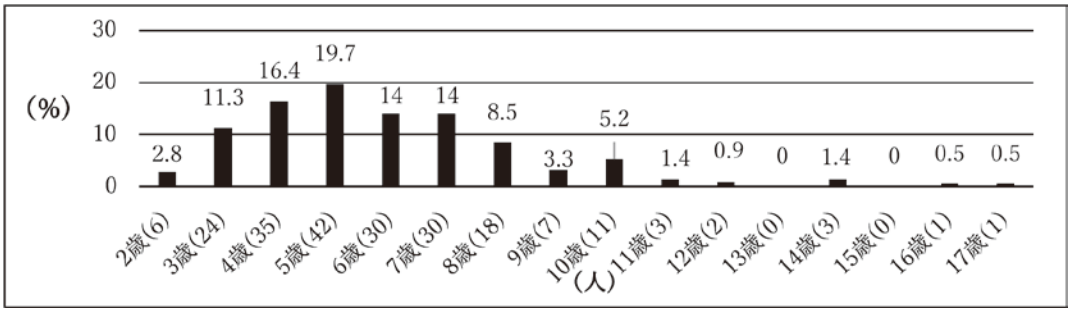
２－４．学習の開始時期（分析対象者：213名）

質問４では，ピアノ学習の開始時期について質問した。結果は，［図１］，［図２］の通りである。

［図１］学習開始年齢（1998）



［図２］学習開始年齢（2021）



1998の学習開始年齢は３才から10才の範囲内にあり，小学校以前に集中している。特に幼稚園や小学校に入園・入学する３才と６才が多く，平均は5.8才であった。2021は２歳から17歳まで幅広く散らばっているが，特に５歳前後が多く，平均は5.9歳（SD：2.56）であった。年齢の散らばり方に違いが見られたが，学習開始年齢の平均については大差がなかった。1998に比べ早期教育が浸透し，２歳から学習している学生がいる反面，少数ではあるが14歳，16歳，17歳の中高生から始めた学生がいたことは，1998と大きな違いであった。この点については，「学習動機」のところで詳しく述べる。

２－5. 学習動機（分析対象者は，未記入者1名を除き212名）

質問５では，ピアノ学習の動機について質問した。結果は，［表４］の通りである。

［表４］学習動機（1998・2021）

	親の勧め	友達の影響	家族の学習を見て	自分の意志	その他
1998	38%	29%	15%	12%	6%
2021（人）	46.2%（98）	13.2%（28）	10.8%（23）	25.0%（53）	4.7%（10）

2021では，カイ二乗検定の結果，有意な差が認められ（$\chi^2=114.0$，df＝4，p<.01），多重比較により「親の勧め」が一番多く，次に「自分の意志」が多いことが分かった。川村は「親の勧め」が多いことに関して，次のように述べている。

> 学齢期のピアノ学習の開始が５，６才をピークにしていることを考えれば，学習の動機，あるいは学習のきっかけに関して,「親のすすめ」の率が高くなることは当然だとも言える。自主的におけいこごとを始めるような年齢ではないからである（1999：65）。

先程も述べたように，2021も学習開始年齢の平均が1998とほとんど変わらないことから，同じことが言える。ただし，先程述べた中高生から始めた学生の動機は,「大学受験で必要だった」（２名）「自分の意志」（３名）であり，親の考えは学齢期ほど影響を及ぼしてしていないと推測される。1998と2021との違いは,「友達の影響」「家族の学習を見て」が減り,「自分の意志」が増えていることである。この点に関して八木正一は，高度経済成長期における価値観について次のように述べている。

> 高度経済成長を支えたのは,「隣が○○をすればわが家も○○をする」といった横並び的な価値観でもあった。こうした価値観を背景にして，みんなが同じものを習ったというのが70～80年代の状況であった（八木 2016：8）。

八木が述べるように，1998の学生が学齢期だった1980年代後半は，横並び的な価値観が根深く，友達や両親や兄弟など家族の影響を多大に受けた時代であったと考えられる。ピアノ学習においても同様であったのだろう。しかし，2021の学生が学齢期だった2010年前後は，横並び的な価値観や考え方

はかなり減少したと思われる。また,「友達の影響」が減った要因としては，少子化[10]により近所に同じ位の年齢の子どもが少なくなったこと，共働きが増え[11]，近所付き合いが希薄になったこと，子どもの習い事が多く，友達と一緒に過ごす時間が少なくなったことなどが推測される。また,「家族の学習を見て」が減った要因としては，一人っ子が増え，一番影響を受けやすい兄弟が少なくなったことがあげられる。

その一方で「自分の意志」が1998よりも増えたのは，先程述べた学習開始年齢の幅広さ，特に小学校高学年から高校生にまで広がっていることがあげられる。参考までに，２歳から９歳までの幼児期及び小学校低学年と10歳から17歳までの小学校高学年及び中高生の２つに分け,「親の勧め」でピアノを始めた学生と「自分の意志」で始めた学生を比較してみた。結果は，［表５］の通りである。

［表５］年齢別による「学習動機の違い」(2021)

	親の勧め	自分の意志
２歳～９歳まで（人）	49.5%（95）	21.4%（41）
10歳～17歳まで（人）	14.3%（3）	57.1%（12）

２歳から９歳までの方が「親の勧め」が圧倒的に多いのは当然であるが，注目すべき点は，2021では「自分の意志」でピアノを始めている学生が21.4%もいることである。この点について，1998は調査を実施していないが，2021の結果は，1970年代から1980年代に根付いていた横並び的な価値観や考え方から脱却し，親が子どもの意志を尊重するように変わりつつあることを示している。

２－6. 現在のピアノの学習状況（分析対象者：213名）

質問６では，現在のピアノの学習状況について質問した。1998は,「現在も続けている」と回答したのは，女子学生１名だけだった。2021の結果は，［表６］の通りである。

［表６］現在のピアノ学習状況（2021）

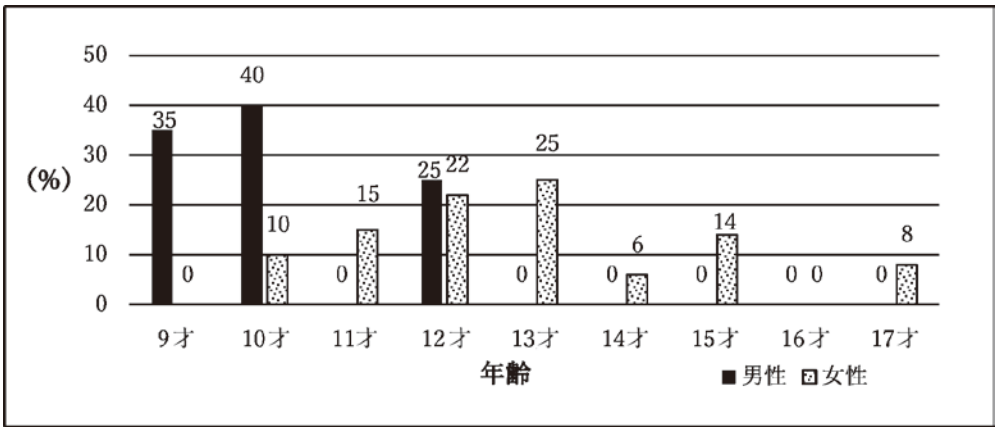
	途中でやめて，現在も習っていない	一度も中断せずに，現在も続けている	途中で中断したことがあるが，再度始め，現在も続けている
2021（人）	78.9%（168）	15.5%（33）	5.6%（12）

2021も途中でやめた学生が多かったが，それでも「一度も中断せずに，現在も続けている」学生が15.5%を占め，予想を超える数値となった。詳しく調査はしていないが，回答者の中には，音楽を専攻している学生が含まれている[12]ことも要因の１つであると考えられる。

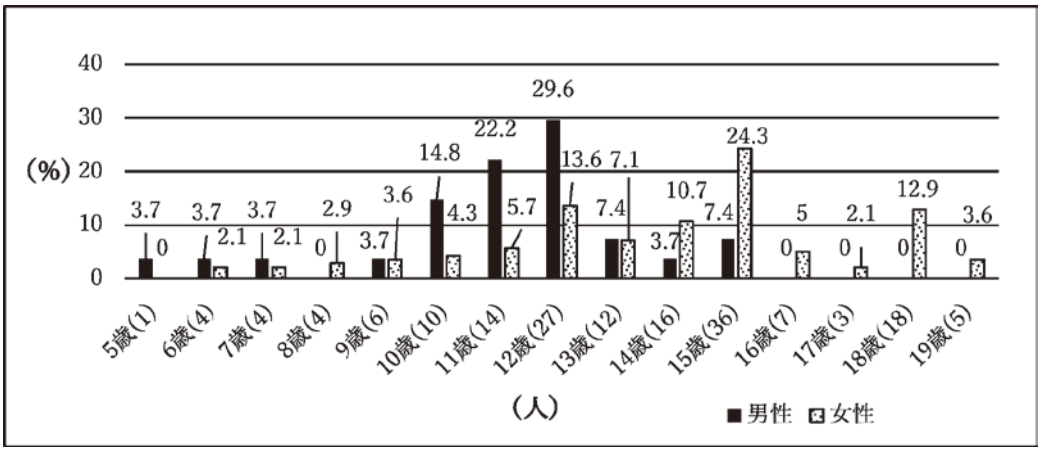
２－7. 学習の中断と学習期間（分析対象者は，未記入者1名を除き167名）

質問７では，学習の中断時期について質問した。結果は，［図３］,［図４］の通りである。

［図３］学習中断時期（1998）



［図４］学習中断時期（2021）



川村は，［図３］の結果から，学習中断時期と学習期間について次のように述べている。

男子学生の場合，小学校の段階で75%が学習を中断している。残りの25%は中学生になって中断したことになる。女子学生と比べると，中断時期の山が早くなっている。女子学生は，男子学生と比べると，中断時期が分散していると同時に，学習期間が長い。女子の場合の中断のピークは13才である。ほぼ同じ割合で，12才で22%が中断している。（略）さらに，女子の場合，第三の山が15才，つまり高校進学時にある。男女で考えると，中学生になった時点で，ピアノ学習を中断するケースが多いことが分かる。（略）学習開始平均年齢は5.8才で，平均学習期間は7.7年である。おおよそ５才（5.8才）で習いはじめて，12才のうちには学習を中断するという一般的な傾向が明らかになった（1999:48）。※（ ）は筆者補筆

2021では，どのように変化したのだろうか。男子学生の場合，小学校の段階で51.8%がやめており，

1998より約23ポイント低かった。これは，1998は９才以前と13才以降にやめる男子学生はいなかったが，2021は９歳以前に11.1%がやめている反面，中学時代に中断した男子学生が18.5%にものぼり，さらに，現在も続けている学生が３名もいることから，二極化が要因の１つと考えられる。昔に比べ，現在は「ピアノは女子が習うもの」という考えが希薄になっていることが推測される。最近は，中学校の合唱コンクールで伴奏を弾く男子生徒の姿もよく見られるし，それを「かっこいい」「羨ましい」と思う同級生もインタビューを通して多く聞かれた。一方，女子は男子と比べると，学習期間は長く，中断時期が分散しており，1998と同じような傾向が見られた。中断のピークは15歳で，高校進学時にあたる。第二のピークはほぼ同じ割合で，12歳と18歳である。1998と異なる点は18歳，つまり大学入学時にも１つのピークがあることである。2021では，1998よりも高校生になって継続する女子学生が多く見られた。また，現在も続けている女子学生が42名もいたことも予想外であった。学習期間を平均すると，2021では男女で7.1年であり，1998の7.7年よりも若干短いが，これは，男女とも５歳から10歳の比較的早い時期にやめている学生がいることが要因の１つであると想定される。

まとめると，2021では，学習開始年齢は5.9歳で，平均学習期間は7.1年であり，1998とは多少違う傾向も見られたが，おおよそ６歳で習い始めて，13歳つまり中学入学時で中断するという一般的な傾向は，1998でも2021でもほぼ変わらなかったと言える。

２－8. ピアノ学習をやめた理由（分析対象者は，未記入者１名を除き167名）

質問８では，ピアノ学習をやめた理由について質問した。結果は，［表７］，［表８］[13]の通りである。

［表７］ピアノ学習中断の理由（1998）

	学校生活が忙しい	教師の問題	練習嫌い	その他
1998	66%	30%	2%	2%

［表８］ピアノ学習中断の理由（2021）

	学校生活が忙しい	塾や受験勉強が忙しい	教師の問題	練習の問題	他の習い事が忙しい	その他
2021（人）	34.1%（57）	26.9%（45）	1.8%（3）	14.4%（24）	10.2%（17）	12.6%（21）

2021では，カイ二乗検定の結果，有意な差が認められ（$\chi^2=69.73$，df＝5，p<.01），多重比較により「学校生活が忙しい」と「塾や受験勉強が忙しい」が多く，次に「練習の問題」が多いことが分かった。

1998の「学校生活が忙しい」(66%）の中には，受験勉強等も含まれているので，2021の「学校生活が忙しい」と「塾や受験勉強が忙しい」を合計したもの（61.0%）は，1998とほぼ同じ割合と考えられる。大きな違いは，「練習の問題」が多かったことと「教師の問題」が激減したことである。「練習の問題」が多かったのは，おそらく塾や部活動や他の習い事をしながら限られた時間の中で練習時間をとることの難しさやピアノ特有の毎日練習しなければならないことが，かなりの負担になっている

と推測される（「教師の問題」が激減した理由については，次の２－９で述べる）。

また，先程述べたように，５歳から10歳まででやめた学生の中断理由の多くは，「他の習い事が忙しい」であった。2007年の文部科学省の調査によると，小中学生の習い事の数は，低学年ほど複数の習い事に通っている割合が高いが，高学年に上がるにつれ，減少していた（文部科学省 2008）。これは，時間のやりくりが徐々に大変になり，数年間習っていた複数の習い事を，子どもの適性や興味などから継続していくものに絞っていく傾向が見られたからである。なお，「その他」には，「上達した感じがなかった」「もう十分だと思った」などがあげられていた。

２－9. ピアノ学習での嫌なこと・困ったこと（分析対象者は，未記入者４名を除き164名）

質問９では，ピアノのレッスンで嫌なことや困ったことについて質問した。結果は，［表９］，［表10］[14]の通りである。

［表９］ピアノ学習での嫌なこと・困ったこと（1998）

	教師の問題	その他	練習の問題	教材の問題
1998	30%	26%	23%	21%

［表10］ピアノ学習での嫌なこと・困ったこと（2021）

	教師の問題	その他	練習の問題	教材の問題	特になし
2021（人）	7.3%（12）	3.0%（3）	59.8%（98）	6.0%（6）	23.8%（39）

2021では，カイ二乗検定の結果，有意な差が認められ（$\chi^2=183.37$，df＝4，p<.01），多重比較により「練習の問題」が多く，次に「特になし」が多いことが分かった。

1998は，「教師の問題」がやや多かったが，「練習の問題」「教材の問題」「その他」も同じ位の割合を示し，多方面で生徒は不満をもっていたようである。「教師の問題」については，「先生に怒られる」「弾けないと先生が手をたたく」「先生が嫌い（ヒステリー）」（1999：52）など教師の振る舞いに対する不満が多くあげられていた。1980年代のピアノ教師について，稲垣涼子は，ピアノ教育雑誌「レッスンの友」及び「ムジカノーヴァ」の記事の分析をもとに，次のように述べている。

> 1980年代のピアノ教育において課題として浮上したのが，学習者の「落ちこぼれ」問題である（稲垣 2020：34）。
> （1980年代のピアノ教育の状況について大村典子と赤沢立三は）ピアノ教育における「落ちこぼれ」を生みだした背景について，学習者の資質や能力等だけではなく，教師の学習者に対する態度など教師にも問題があるとしている（2020：38）。※（　）は筆者補筆

これらの指摘は，1980年代は，「教師の思い通りに弾くことができない」あるいは「練習してこない」生徒に対する教師の振る舞いが問題視されるようになったことを示唆しており，1998の結果とも

一致している。1990年代に入り，1980年代に浮き彫りにされた教師の課題について，稲垣は，当時のピアノ教育雑誌の分析をもとに，次のように指摘している。

> 少なくとも当時のピアノ教育には，大きく分けて二つの課題があったとみられる。一つ目が「生徒の減少」，そしてもう一つが「多様な人物とのコミュニケーション」である（2020：62）。

稲垣の指摘は，1990年代に入り，少子化や習い事の多様化によりピアノの学習者が減り，ピアノ教師は，それまでの指導法や生徒や保護者との関わり方，教材の選択などをしていては，生徒が集まらないと危惧し，変えざるを得なくなったことを示唆している。2021では，「教師の問題」や「教材の問題」が激減していることや「特になし」を選択した学生が23.8%いたことからも，教師が指導面において，様々な努力をしたことが読み取れる。しかし，今回浮き彫りになったのは，「練習の問題」である。1998と2021では，23%から59.8%へと「練習の問題」の数値が36.8%増加した。それは，なぜだろうか。先程も述べたが，ピアノは特に継続的な練習が求められる点が他の習い事との大きな違いである。しかし，多くの生徒は塾や部活動や他の習い事に日々追われている。そこで，教師は限られた時間の中で練習時間を捻出することの難しさを十分に理解し，生徒の状況に応じて，「レッスンの振り替えなどに臨機応変に対応する」「教材を取捨選択する」「レッスンに来た時に練習させる」「効率の良い練習方法をアドバイスする」など柔軟に対応していくことも考えていかなければならない。この点に対する教師の配慮が不十分なことが，今回の結果につながったと推測される。

２－10. 今後のピアノ学習（分析対象者は，「一度も中断せずに現在も続けている」，「受験などで途中で中断したが，現在も続けている」45名を除き351名）

質問10では，今後のピアノ学習の希望について質問した。結果は，［表11］[15]，［表12］の通りである。

［表11］今後のピアノ学習について（1998）

	習ってみたい	習いたいとは思わない
男性	93.5%	6.5%
女性	89.5%	10.5%
合計	91.5%	8.5%

［表12］今後のピアノ学習について（2021）（人）

	習ってみたい	習いたいとは思わない
男性	51.6%（64）	48.4%（60）
女性	70.9%（161）	29.1%（66）
合計	64.1%（225）	35.9%（126）

1998は，特に男子学生の学習希望率が非常に高い。この点について川村は次のように述べている。

> この結果には，ピアノ学習率が関係していると思われる。ピアノが未経験であることによって，今後，一度は習ってみたいという「憧れ」に似た気持ちが強くなるのではないかと考えられる。逆に，ピアノの経験があると「一応やったのでもうよい」といった気持ちが働くものと考えられる（1999：53-54）。

先程述べたように，2021の大学生の学齢期の頃の男子のピアノ学習率が10.1%であることを考えると，

1998の学生が学齢期であった1980年代後半の男子の学習率はさらに低かったこと，そのような状況において，男子学生のピアノに対する「憧れ」の気持ちは高かったことが推測される。しかし，2021では，男子学生の希望率は約５割，女子学生も約７割であった。これは，2021の教員養成系大学の男子学生のピアノ学習率が23.6%，女子学生のピアノ学習率が68.0%と全国平均値を大きく上回っていることから，ピアノ経験者が多く「一応やったからもういい」という気持ちと先程述べた「練習の問題」が関係していると推測される。この点に関して，さらにピアノ経験者と未経験者別に集計した結果が［表13］[16]，［表14］である。

［表13］今後のピアノ学習について・経験別（1998）

		習ってみたい	習いたいとは思わない
男性	経験者	87%	13%
	未経験者	100%	0%
女性	経験者	87%	13%
	未経験者	92%	8%
経験者の今後の学習希望		87%	13%
未経験者の今後の学習希望		96%	4%

［表14］今後のピアノ学習について・経験別（2021）（人）

		習ってみたい	習いたいとは思わない
男性	経験者	51.9%（14）	48.1%（13）
	未経験者	51.5%（50）	48.5%（47）
女性	経験者	68.1%（96）	31.9%（45）
	未経験者	75.6%（65）	24.4%（21）
経験者の今後の学習希望		65.5%（110）	34.5%（58）
未経験者の今後の学習希望		62.8%（115）	37.2%（68）

1998は，経験者よりも未経験者のピアノ学習の希望率が非常に高く，男子は100%であった。この点について，川村は次のように述べている。

> 経験者は一度経験したので，今後の学習希望率が低いということであり，逆に未経験者は，経験がないため，今後一度は習ってみたいと考える率が高いということから，こうした差が出てくるのが一点である。
>
> さらに，ピアノ経験者の今後の学習希望率が低いのは，自分が受けてきたピアノ教育が問題点を含み，そのことが今後の学習希望の意欲を阻害しているということが，もう一点の理由として想定しうる（1999：54）。

この場合，川村の言う自分が受けてきたピアノ教育における問題点というのは，先程述べた「教師の問題」や「教材の問題」と考えられる。2021は，女子は未経験者の方が「習ってみたい」という希望率が若干高かったものの，男子は経験者と未経験者との間に差は見られず，全体としても大きな差が見られなかった。この理由について考えられるのは，23年前に比べ，電子ピアノの普及などにより，

ピアノという習い事がさらに大衆化したことである。つまり，現代の大学生の間では，ピアノは既に手の届かない「憧れ」のものではなくなったと想定される。さらに，後で紹介する「習いたくない理由」の中で，「他の習い事にもっと時間を使いたい」「弾きたいと思うが，習ってまではやりたくない」が上位を占めたことからも，「ピアノ以外の事に興味をもっている」「弾きたい気持ちはあるが，そのためにわざわざ時間を割きたくない」という現代の大学生の考えを読み取ることができる。

２－11. 今後ピアノを習ってみたい理由（分析対象者：225名）

質問11では，質問10で「はい」と答えた学生に，ピアノを習ってみたい理由を聞いた。結果は，［表15］の通りである。1998は，下記の５つのカテゴリー別に分け，結果は「趣味として」「楽しみとして」に分類される回答が多く，「学齢期に中断したピアノ学習を再度始めてみたい」という理由もかなり見られた。興味深い回答として，1998では，「週１回とかではなく好きな時に好きな曲を弾く練習ならやってみたい」「気の合う先生とならまたやり直してみたい」があげられていた。

［表15］今後ピアノを習ってみたい理由（2021）

	楽しみとして	趣味として	教師になるためのスキルとして	再教育として	その他
2021（人）	59.1%（133）	20.4%（46）	17.3%（39）	3.1%（7）	0%（0）

2021も，川村と同じ５つのカテゴリーで実施した。その結果，「趣味として」「楽しみとして」という回答が多かったが，「教師になるためのスキルとして」も多く，これは，教員養成系大学ならではの結果と推測される。残念だったのは，「再教育として」が少なかったことである。「途中で中断したピアノ学習をやり直す」というよりは，「好きな時に自由に弾きたい」「習ってまではやりたくない」という気持ちの表れと想定される。この結果は，先程述べた「練習の問題」や「忙しい」「他の事に時間を使いたい」等が要因になっていると推測される。

２－12. 今後弾いてみたい曲（分析対象者は，未記入者１名を除き224名）

質問12では，質問10で「はい」と答えた学生に，「これからピアノを習うとして，どのような曲が弾けるようになりたいですか」と質問した。結果は，［表16］[17]，［表17］の通りである。

［表16］今後弾いてみたい曲（1998）

	クラシック	ポップス
1998	52.9%	47.1%（弾き語り：14%，ジャズ：23%を含む）

［表17］今後弾いてみたい曲（2021）

	クラシック	ポップス	弾き語り	ジャズ	その他
2021（人）	35.3%（79）	7.1%（87）	16.1%（36）	38.8%（16）	2.7%（6）

1998は，「クラシック」が若干「ポップス」を上回ったが，2021は，「弾き語り」「ジャズ」を「ポップス」に含めると62.0%になり，圧倒的に「クラシック」を上回った。これは，1998と比べると，生徒のニーズに合わせ，教師側の教材選択の幅が広がったことやインターネット等でも弾きたい曲の楽譜が一曲から簡単に手に入ることなどが考えられる。また，「その他」では，「合唱曲」や「教材にあるもの」があげられ，教員養成系大学の学生ならではの傾向も見られた。

２－13. 今後ピアノを習いたくない理由（分析対象者は，未記入者４名を除き122名）

質問13では，質問10で「いいえ」と答えた学生に，今後ピアノを「習いたくない理由」について質問した。結果は，［表18］の通りである。1998では詳細を示されておらず，「興味はあるが，他の事にもっと時間を使いたい」「自分で自由にやりたい」「弾きたいと思うが習ってまではやる気はない」などの回答があげられていた。

［表18］今後ピアノを習いたくない理由（2021）

	弾きたいが習ってまではやる気がない	他の事にもっと時間を使いたい	忙しい	ある程度弾けるので，自由に弾きたい	その他
2021（人）	34.4%（42）	34.4%（42）	15.6%（19）	11.5%（14）	4.0%（5）

2021は，「弾きたいが習ってまではやる気がない」「他のことにもっと時間を使いたい」が多く，1998とほぼ同じ結果だった。

２－１４. 家族のピアノ学習状況（分析対象者：396名）

質問19では，全員に，家族のピアノ学習状況（習っている，習っていた）について質問した。結果は，［表19］の通りである。

［表19］家族のピアノ学習状況（2021）（複数回答）

	母親	いない	妹	姉	弟	兄	父親
2021（人）	39.1%（155）	38.6%（153）	15.9%（63）	14.6%（58）	8.8%（35）	5.6%（22）	4.8%（19）

母親がピアノ経験者である学生が，約４割を占めた。現在，大学生をもつ親は，1970年代後半に学齢期を迎えたと推測できる。川村によると，1976年のピアノ普及率[18]は12.2%（1999：12-13），小中学生のピアノ学習率は31%（1999：26）であった。1965年のピアノ普及率は3.4%（1999：12-13），ピアノ学習率は，5.5%（1999：26）であったことから考えると，約10年間で両方とも急激な伸びを示しているものの，ピアノ普及率がわずか12.2%の時代に，ピアノを学習していた母親が４割近くいたことは，驚くべき数値である。この統計からは，男女別のピアノ学習率は分からないが，先程述べた2007年の男子のピアノ学習率が10.1%であることからも，父親のピアノ学習率が4.8%というのはかなり高

い数値である。これらの点から，教員養成系大学の学生の親は，当時，ピアノを購入できるほど経済的にも音楽的にもある程度恵まれた環境で育ったと推定できる。よって，今回調査した教員養成系大学の学生の家庭環境も同様であると考えられ，親の習い事に関する教育的関心も高いと想定される。また，女子のピアノ学習率が高いことから，兄や弟がいる家庭よりも，姉や妹がいる家庭の方がピアノの学習率は高かった。

２－15. 鍵盤楽器の所有状況（分析対象者：396名）

質問20は，全員に，家に所有する鍵盤楽器について質問した。結果は，［表20］の通りである。

［表20］鍵盤楽器の所有状況（2021）（複数回答）

	電子ピアノ	アップライト	キーボード	何もない	グランド
2021（人）	35.6%（141）	29.5%（117）	22.5%（89）	18.2%（72）	7.6%（30）

※アップライトピアノ（以下アップライトと略記），グランドピアノ（以下グランドと略記）

電子ピアノやアップライトを所有している学生が多く，中には両方所有している学生やグランドを所有する学生もいた。川村は，電子ピアノの普及について次のように述べている。

> 電子ピアノは，80年代の中，後半から生産が倍増している。（略）ピアノは，80年代以降，生産が低落していく。（略）それにとって代わったのが電子オルガンや電子ピアノなどの電子楽器である（1999：14-15）。

この点に加え，住宅事情なども考えると，電子ピアノの所有率の方がアップライトよりも高いという結果は当然である。また，教員養成系大学の学生が学齢期であった2009（平成21）年のピアノ普及率は，2017年の全国消費実態調査によると，全国平均で19.8%である（電子ピアノを含む）（全楽協事務局 2017）。その数値と比較しても，アップライトの所有率29.5%は全国平均値を大きく上回っており，ピアノ学習率（53.8%）の高さとも結びついていると考えられる。

３．結語

本論では，社会や親と子どもの考え方の変化に着目しながら1998と2021の調査結果を比較し，ピアノ学習の変化について分析，検討した。結語では，特徴的な変化と課題を指摘するとともに，今後のピアノ教育のあり方について私見を提示する。

1998では，「教師の問題」「練習の問題」「教材の問題」の三点が，学校生活の忙しさとも重なり，ピアノ学習の悪循環を生みだし，子どもを中断へと追い込んだと述べられている。しかし，2021では，質問８と９の結果から「教師の問題」と「教材の問題」はほとんど見られなくなった。これは，1980年代に問題視された教師の振る舞いなどを各ピアノ教師が改めたこと，生徒のニーズや技量に合った教材の選択に努力を重ねた結果だと思われる。

今回浮き彫りになったことは，「練習の問題」である。これは，習い事の多様化や塾通いの低年齢化，中学受験率の高さなど様々な要因と絡み，子どもが多忙になり，一概にピアノ教師だけの責任とは言い難い部分もある。しかし，ピアノ教師も練習に対する意識を改める必要がある。レッスンに来る子どものほとんどは，将来，音楽大学に進むわけではなく，趣味や楽しみとしてピアノを学習している。2021の結果からも，多くの大学生が，ピアノを趣味や楽しみとして位置付けていることが分かった。それゆえに，ハードな練習を課したりするのではなく，生徒それぞれのペースや技量，性格，目的をしっかり把握し，柔軟に対応していかなければならない。時には，決まりきったレッスンの進め方ではなく，教材を減らしたり，興味のある曲を取り入れたりと生徒一人一人に合ったオリジナルなカリキュラムを考え，実践していくことが不可欠だと考える。そして「この先生となら一緒に学びたい（学ばせたい）」「先生のレッスンは楽しい」と子どもや親が思えるような人間関係･信頼関係が築き上げられるように，常に子どもや親と向き合い，対話を通してじっくり話を聴くこと，そして相手が何を求めているのか，何を悩んでいるのかなどを察知し，迅速に対応する能力もピアノ教師には必要である。

これからのピアノ学習は，親に勧められて始めるよりも，自分の意志で始める子どもが増えてくることが予想される。将来を見据えた時に，やらされ感のあるピアノ学習にならないよう趣味や楽しみの枠にとどまらずに，自律的に音楽活動を広げていけるように，ピアノ教師の一人として指導していかなければならない。一人でも多くの子どもが，成人になっても，さらに高齢者になっても，レッスンを一日でも長く続けることにより，毎日心豊かに過ごすことができるよう，生涯音楽学習を見据えたレッスンを心がけていくことの重要性が示唆される。

本研究のアンケート調査を実施するにあたり，協力してくださった各地の国立の教員養成大学及び教育学部とそれに準ずる学部の先生方と学生の皆様に，心からの謝意を表します。

註

1　本論でいう教員養成系大学とは，国立の教員養成大学及び教育学部とそれに準ずる学部を指す。

2　NHK放送世論調査所「全国意向調査結果報告書」，文部省「児童・生徒の学校外学習活動に関する実態調査報告書」，東京都「教育に要した費用の調査」，総務庁青少年対策本部「青少年の生活と意識基本調査報告」などから推計し，川村が作成。

3　例えばBANDAI（2019）による調査では，習い事の月謝は次のようになっている。ピアノ：7,200円，水泳：6,471円，習字：3,451円

4　川村は，「大手の音楽教室以外の音楽教室」という選択肢は設けておらず，一括して音楽教室として示している。

5　［表３］の選択肢に「大手の音楽教室以外の音楽教室（楽器店などが経営する音楽教室）」を新たに加えた。

6　「その他」は，「今までに大手の音楽教室と個人の教師など複数の場で習った」「親に教えてもらった」という回答である。

7　歌唱・リズム遊び・音楽鑑賞など多彩でかつ本格的な音楽体験を重ねることで，豊かな感性や情緒を育むことをねらいとしている（１～３歳児の親子対象）。

8　DVDやイラストを使った教材を取り入れ，「うれしい」「かなしい」といった音楽の表情をとらえ，たくさんの音楽を聴き，打楽器や鍵盤楽器を使って表現力やリズム感，豊かな感性を育むことをねらいとしている（３歳児対象）。

9　2021年２月19日に，私立大学教育学部の女子学生に，オンラインにてインタビュー調査を実施。

10　合計特殊出生率は，1979年が1.77人で，2000年は1.36人に減少している。

11　共働き世帯数は，1997（平成９）年が949万世帯で，2017（平成29）年は1188万世帯に増加している。

12　紙面の都合で省略した質問21「現在，音楽全般と何か関わっていますか」で，「その他」を選択した学生の中で，「教育学部で音楽を専攻している」という回答が見られた。

13　［表８］は，「学校生活が忙しい」から「塾や受験勉強が忙しい」を独立させ，さらに，「他の習い事が忙しい」を加えた。

14　［表10］の選択肢に「特になし」を加えた。

15　［表11］の合計の数値は，人数から計算したものかどうか定かではない。

16　［表13］の経験者・未経験者の今後の学習希望の数値は，人数から計算したものかどうか定かではない。

17　［表16］では，「弾き語り」「ジャズ」を含めてポップス（47.1%）と示しているが，2021は分けて示した。

18　経済企画庁「家計消費の動向」平成６年版より川村が作成。

引用・参考文献・参照サイト

稲垣涼子（2020）「1960年代から現在に至るピアノ教育の変遷とその後の展望－ピアノ教育雑誌の検討を中心に－」『国立音楽大学大学院修士論文』pp.1-116.

河合塾Kei-Net（埼玉大学｜学部・学科，玉川大学｜学部・学科）https://search.Keinet.ne.jp（2021.9.1 アクセス）.

川村有美（1999）「学校外のピアノ教育に関する実践的研究－生涯学習へ向けたピアノ教育理念の再構築－」『埼玉大学大学院修士論文』pp.3-150.

[公式]ヤマハ音楽教室　https://www.yamaha-ongaku.com/（2021.9.1 アクセス）.

国立社会保障・人口問題研究所－（出生数，普通出生率，ならびに合計特殊出生率：1947～98年）http://www.ipass.go.jp（2021.9.10 アクセス）.

全楽協事務局（2017）「全国消費実態調査」における「ピアノ普及率」https://www.zengakkyou.com（2021.9.6 アクセス）.

男女共同参画局「男女共同参画白書概要版 平成30年版」https://www.gender.go.jp（2021.9.6 アクセス）.

BANDAI（2019）「子どもの習い事に関する意識調査」https://www.bandai.co.jp（2021.9.1 アクセス）.

文部科学省（2008）平成19年「子どもの学校外での学習活動に関する実態調査」https://www.mext.go.jp（2021.9.1 アクセス）.

八木正一（2016）「習い事の移り変わり～音楽を中心に～」『音楽文化の創造』76 , pp.7-10.

吉井妙子（2015）『音楽は心と脳を育てていた ヤマハ音楽教室の謎に迫る』日経BP社 p.27.

［資料 1］

「ピアノ学習に関するアンケート」（川村 1998）

性別 男性　女性

1. ピアノまたはオルガン(エレクトーンも含む)を習ったことはありますか。
ピアノ　ある　ない
オルガン（エレクトーン）　ある　ない
*習ったことのない人は, 質問 7 へ

2. 習ったことのある人にお尋ねします。習っていたのは個人の教師ですか, それともヤマハなどの音楽教室ですか。 ※この質問は, 質問紙上ではなく別途補助的にとったようである。
個人の教師　音楽教室(ヤマハ・カワイなど)

3. 習ったことのある人にお尋ねします。何才の頃から習い始めましたか。
才頃

4. 習ったことのある人にお尋ねします。今でも続けていますか。
はい　いいえ
4-1. 「いいえ」と答えた人にお尋ねします。いつ頃, どんな理由でやめたのですか。
やめた時期　才ころ
やめた理由

5. 習ったことのある人にお聞きします。習い始めた動機は何ですか。

6. 習ったことのある方にお尋ねします。ピアノやオルガンのレッスンで, いやなことや困ったことがあった人は, 次にそれを書いてください。

7. みなさんにお尋ねします。
7-1. これから機会があれば, ピアノを習ってみたいですか。
はい　いいえ

7-2. 「はい」の人も「いいえ」の人もその理由を書いてください。

7-3. 「はい」の人に聞きます。これからピアノを習うとして, どんな曲が弾けるようになりたいですか。

＜質問8は省略＞

①一度も中断せずに, 現在も続けている ②受験などで途中で中断したことがあるが, 再度始め, 現在も続けている ③途中でやめて, 現在は習っていない

7. 6 の質問で「途中でやめて, 現在は習っていない」と答えた方にお尋ねします。いつ頃やめましたか。※年齢でお答えください。

8. 6 の質問で「途中でやめて, 現在は習っていない」と答えた方にお尋ねします。どのような理由でやめましたか。最もあてはまるものを1つ選択してください（「その他」を選択した方は, 簡単に記述してください）。

①学校生活(勉強・部活動等)が忙しい ②塾や受験勉強が忙しい ③他の習い事が忙しい ④教師の問題(教師が嫌い・怖い等) ⑤練習の問題(練習が嫌い・つらい・面倒である・練習する時間がない等) ⑥その他

9. 2 の質問で「習ったことがある」と答えた方にお尋ねします。ピアノ(電子オルガンを含む)のレッスンで, 嫌なことや困ったことは何でしたか。最もあてはまるものを1つ選択してください(「その他」を選択した方は, 簡単に記述してください)。
※ 6 の質問で「一度も中断せずに, 現在も続けている」または, 「受験などで途中で中断したことがあるが, 再度始め, 現在も続けている」と答えた方は質問 14 へ。

①教師の問題(教師が嫌い・怖い等) ②練習の問題(練習が嫌い・つらい・面倒である・練習する時間がない等) ③教材の問題(教材がつまらない・難しい等)
④特になし ⑤その他

10. 2 の質問で「習ったことがない」または, 6 の質問で「途中でやめて, 現在は習っていない」と答えた方にお尋ねします。これから機会があれば, ピアノを習ってみたいですか。

①はい(習ってみたい)　②いいえ(習いたいとは思わない)
※「いいえ」と答えた方は, 質問 13 へ

11. 10 の質問(これから機会があれば, ピアノを習ってみたいですか)で「はい」と答えた方にお尋ねします。習ってみたい理由は何ですか。最もあてはまるものを1つ選択してください(「その他」を選択した方は, 簡単に記述してください)。

①趣味として ②楽しみとして(音楽やピアノが好き・自分の好きな曲が弾きたい・弾けると楽しそう等)③教師になるためのスキルとして ④再教育として(また弾けるようになりたい・中途半端で終わったからやり直したい) ⑤その他

［資料 2］

「ピアノ学習に関するアンケート」（唐津 2021）

1. 性別をお答えください。
①男性　②女性

2. ピアノ(電子オルガンを含む)を習ったことはありますか。
※「習ったことがない」と答えた方は, 質問 10 へ

①習ったことがある　②習ったことがない

3. 2 の質問で「習ったことがある」と答えた方にお尋ねします。習っていたのは個人の教師ですか, それとも音楽教室ですか（個人の教師, 音楽教室以外で習った方, またはレッスンを一度中断し, 再度習い始めた等複数の場所で習った方はその他を選択し, 簡単に記述してください)。

①個人の教師 ②ヤマハ・カワイなどの大手の音楽教室 ③大手の音楽教室以外で, 楽器店などが経営する音楽教室 ④その他

4. 2 の質問で「習ったことがある」と答えた方にお尋ねします。何歳の頃から習い始めましたか。※レッスンを一度中断し, 再度習い始めた等複数の場所で習った方は, 最初に習い始めた年齢を選択してください(「その他」を選択した方は, 年齢を記述してください)。

①2 歳 ②3 歳 ③4 歳(年少) ④5 歳(年中) ⑤6 歳(年長) ⑥7 歳(小1) ⑦8 歳(小 2) ⑧9 歳(小 3) ⑨10 歳(小 4) ⑩その他

5. 2 の質問で「習ったことがある」と答えた方にお尋ねします。習い始めた動機は何ですか。最もあてあまるものを1つ選択してください（「その他」を選択した方は, 簡単に記述してください)。

①親の勧め ②友達の影響 ③家族の学習を見て ④自分の意志 ⑤その他

6. 2 の質問で「習ったことがある」と答えた方にお尋ねします。今でもピアノ(電子オルガンを含む)のレッスンを続けていますか(「その他」を選択した方は, 簡単に記述してください)。
※「一度も中断せずに, 現在も続けている」または, 「受験などで途中で中断したことがあるが, 再度始め, 現在も続けている」と答えた方は, 質問 9 へ

12. 10 の質問で「はい」と答えた方にお尋ねします。これからピアノを習うとして, どのような曲が弾けるようになりたいですか。最もあてはまるものを1つ選択してください（下記以外のジャンルや具体的な曲名・作曲者やアーティスト名等がある方は, 「その他」を選択し, 簡単に記述してください）。 ※質問 14 へ

① クラシック系 ②ポップス系 ③ジャズ系 ④弾き語り ⑤その他

13. 10 の質問で「いいえ」と答えた方にお尋ねします。習いたくない理由は何ですか。最もあてはまるものを1つ選択してください(「その他」を選択した方は, 簡単に記述してください)。

①他の事にもっと時間を使いたい ②忙しい ③ある程度弾けるので, 自分で自由に弾きたい ④弾きたいと思うが, 習ってまではやる気がない ⑤その他

＜質問14～18は省略＞

19. みなさんにお尋ねします。ご家族の中で, ピアノ(電子オルガンを含む)を習っている(習っていた)方はいますか。あてはまるものを「全て」選択してください。

①父親 ②母親 ③兄 ④姉 ⑤弟 ⑥妹 ⑦いない

20. みなさんにお尋ねします。家に何か鍵盤楽器はありますか。あてはまるものを「全て」選択してください。※一人暮らしの方は, ご実家にある鍵盤楽器をお答えください。

①アップライトピアノがある ②グランドピアノがある ③電子ピアノ(ピアノと同じ 88 鍵あるもの)がある ④キーボードがある ⑤何もない

＜質問21は省略＞

※お忙しい中, 最後までお答えいただき, 有難うございました。